

連携先世界遺産： 比叡山延暦寺

本科目が取り組んだ課題・改善事項

古文書に残された情報を手掛かりに、比叡山を訪れる人々が昔の景観を思い描くためのビジュアル制作物を生み出す

■ 受講生

氏名（50音順）で記載してください。

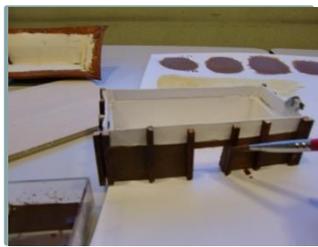
川波 玲雅（京都文教大学・総合社会学部・3年生）、河村 郁実（同・3年生）、北村 祐大（同・3年生）、衣川 純弥（同・2年生）、倉田 哲也（同・3年生）、近藤 千夏（同・3年生）、高田 大輔（同・2年生）、徳田 雄太郎（龍谷大学・文学部・3年生）、富田 円（京都文教大学・臨床心理学部・4年生）、堀江 彩加（京都文教大学・総合社会学部・3年生）、水野 優斗（同・2年生）、南 摩耶（京都文教大学・臨床心理学部・4年生）、山本 龍之介（京都文教大学・総合社会学部・3年生）、渡部 嵩士（同・3年生）

■ 担当教員

手嶋英貴（京都文教大学・総合社会学部・教授）

活動目的・概要

奈良時代末に、天台宗祖・最澄によって最初のお堂が建てられて以来、比叡山内の様子は、数多くの記録に書き継がれてきました。そのため主な堂舎については、1200年以上の歴史の各時期にどのような景観を持っていたかを推測することができます。そこで本授業では、比叡山にやってくる多くの観光客、参拝客に過去の様子を想像してもらえようようなビジュアル成果物を作ることに努めました。「記憶の継承」という、昔の人々が重んじた営みの一端を形にすることで、その価値を多くの人と共有したいと考えたのです。授業期間中には、比叡山の記録文書に関する専門家の講義を経て、土日を利用した山上での一泊研修を行いました。そこでは比叡山の歴史・宗教を学び、また地形や建物の素材など成果物作りに必要となる情報も収集しました。続いて、比叡山の中心的存在である「根本中堂」（国宝）の景観を、創建時（三堂一組）、統合時（一堂内三分区）、拡張時（現在の前身）という三つのレベルに分けて作成し始めました。作業のはかどり具合にバラつきがあったため、最終的には「創建時」の再現に的を絞り、粘土や紙・布など多様な素材を組み合わせてこれを再現しました。



◆ 主な活動

2016. 5. 22 ガイダンス

2016. 6. 1 専門家による講義、現地調査の準備

2016. 6. 11 比叡山上での研修・現地調査

2016. 6. 12 日吉大社、叡山文庫等での学習

2016. 6. 15 情報の整理、成果物イメージ作り

2016. 6. 22 成果物の作成

2016. 6. 29 成果物の作成

2016. 7. 6 成果物の作成

2016. 7. 13 成果物の作成

2016. 7. 16 中間発表（京都文教大学にて）

2016. 7. 20 成果物の作成、今後の段取り決め

2016. 11. 2 成果物の作成

2016. 11. 9 成果物の作成

2016. 11. 30 成果発表に向けた準備

2016. 12. 11 世界遺産関係者と振り返り、成果発表

活動の成果

「創建期の根本中堂」の再現模型

ふつう、ある場所の景観の変化を、1200年以上にもわたって詳しく辿ることはかなり困難です。もちろん有名なお寺や神社等であればある一時点の景観が、とくに重要な場所に的を絞った形で、古文書や絵図に描かれることはありました。しかし境内の全体にわたって、その様子を誰かが「継続的に」記録するといったことはまず起こらなかったのです。

その点で、比叡山延暦寺は例外的存在の一つと言えます。比叡山は遙か昔から、山城（今の京都）と近江（今の滋賀）の両側から高峰として仰がれ、神の山として崇拝されていました。それが最澄の入山以来、日本仏教の一大霊場として発展するうち、一つの信仰の在り方として、境内の姿を僧たちが文書に残すようになります。平安時代の後半には、その仕事をする専門の僧侶を記家（きけ）と呼ぶようになり、多くの記録文献が作られていきました。

こうして比叡山に関しては、現代を生きる私たちにも、遙か昔に失われた建物や境内の様子を具体的に知る手掛かりが残されたのです。しかし、いかに貴重な文化資源であっても、文字情報のままでは多くの人とその価値を共有することが出来ません。それは大変に惜しいことです。そこで私たちは、古文書や古地図の中から情報を汲み上げ、現代の人々が過去の比叡山へとタイムトリップ出来るようなビジュアル作品を生みだそうと考えました。

今回は、比叡山延暦寺の中心のお堂である「根本中堂」（国宝）の、創建時の姿を模型で再現しました。根本中堂は、今でこそ正面幅が37メートル、奥行が24メートルにおよぶ銅板葺きの大堂であり、江戸初期の代表的な寺院建築の一つとして国宝に指定されています。しかし奈良時代の末（788年）、最澄がその前身となる建物を最初に造った時は、正面が約10メートル、奥行5メートルに満たない檜皮屋根の小さなお堂が三つ並んでいました。

当時の最澄はまだ二十歳すぎの無名の僧であり、今の京都盆地は湿地帯で、平安京も造営されていません。志を抱きながら静かに修行するための空間を、独力で開いた頃にあたります。授業を通じて作った再現模型は、石灰粘土を主な材料としており、柔らかみのある造形が特徴です。決して精密なものではありませんが、かえって若き日の最澄と創建期の比叡山に似合った質朴さを感じてもらえるのではないのでしょうか。なお模型の地面には、山上の「気」を少しでも感じていただこうと、比叡山から持ち帰った土を敷いてみました。

文化遺産と言うと、建物や彫像、書画などの造形物がすぐに思い起こされますが、それとは別に「伝承」という形のない財産があります。時間とともに消えていくものを、言葉による伝承として後世に残した人々、またそれを継承することに努めた先人が多くいたことを、授業の中で学びました。

現在の根本中堂



創建期の根本中堂(再現模型)



活動を振り返って

履修生の声

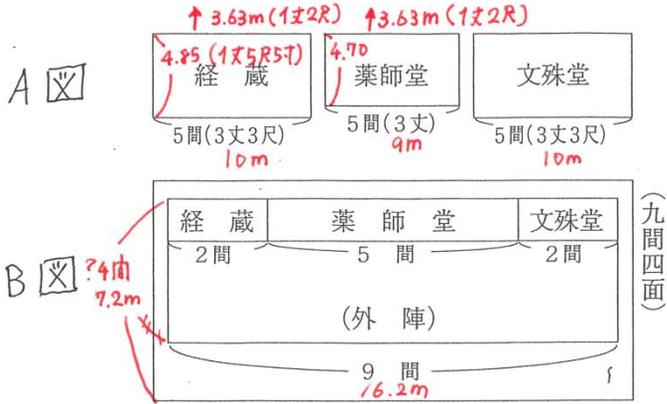
- ・チームで協力するということが出来ている。作業していく中で問題が起こったり、進まないこともあるが、意見を出し合って解決し、進めることが出来ている。
- ・私は非常に不器用な人間なのですが、そんな自分が社会の中で人とどう関わっていけばいいか、指針を得たと思います。
- ・宿泊研修を終えて、グループでの活動を通して協調性を高めようと意識した。12月の発表までに制作物を何とか完成させたい。
- ・昔の建物を想像して作る力が身についた。グループワークでは自身を持って自分から踏み出せるようになったため、今後に活かしていきたいです。規律性が一番成長しました。
- ・経験者にやり方を教わりながら進んで行動した。他人の意見を良く聞き、理解し、ともに一つの目標を実現させていくことが出来た。

担当教員からのコメント

この授業を構想したきっかけは、学生たちが意外に比叡山へ行ったことがないと聞いたことでした。日本の歴史上きわめて重要な場所がせつかく近くにあるのにもったいない。それならば、ぜひ比叡山に学生たちと登って、ともに清々しい気を吸い込み、その歴史や文化を学ぶような授業をしてみようか、というほどの考えでした。そこまでは思い描いていたように進みましたが、PBLの本領と言わなければならない成果の創出にはいくらか苦労がありました。実は作品制作をともなう授業じたい初めての経験で、作業の指導も手探りです。そんな中、学生たちは自分たちで模型の素材を決め、材料の買い出しも行って、よく取組んでくれました。教員自身は今後に向けて反省が少なくありませんが、学生には拍手を送りたいと思います。その上で思い残しがあるとすれば、班作業のための人数がなかなか揃わない時があり、予定していた制作物を仕上げられなかったケースがあったことでしょうか。こうした進捗管理という点で（教員の指導力不足も含めて）課題が残ったと感じています。

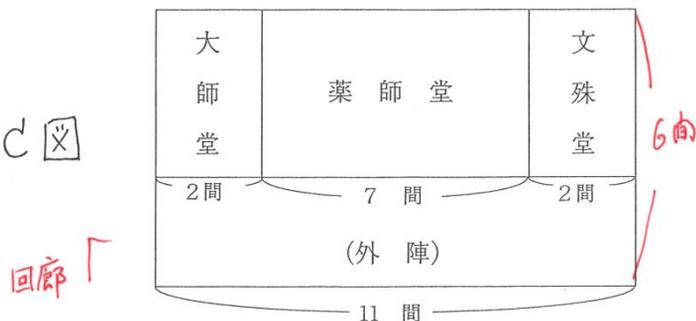
活動資料

195 四 比叡山の諸堂



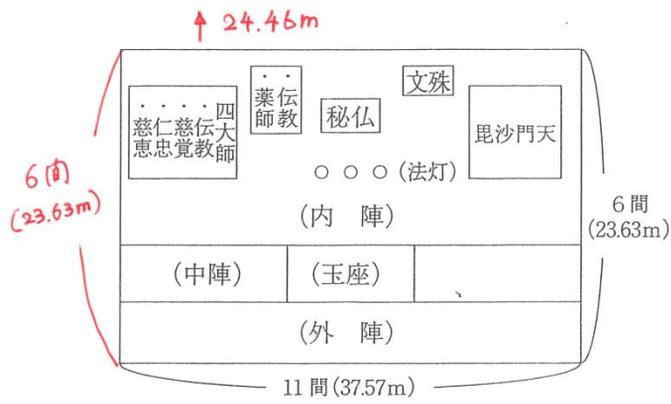
(1)最澄創建の三堂
 延暦7年(788)

(2)円珍の改修
 仁和3年(887)



(3)良源の大堂
 天元3年(980)

(4)織田信長の焼き討ち
 元亀2年(1571)



(5)徳川家光の復興
 寛永19年(1642)
 }
 現在に至る

根本中堂の変遷

根本中堂の変遷を古文書の記録に基づいてまとめた資料です。古代の尺貫法で記録された寸法を現代のメートル法に直しながら、模型作りに活用しました。